

建設省土木研究所 ○正員 島谷幸宏

正員 松浦茂樹

1. はじめに

都市域に人口が集中する過程で都市の人工化・コンクリート化が進み、都市内における自然空間は、しだいに減少してきている。また、石油ショック以降、人々の住環境に対する要望も、“うるおい”や“ゆとり”というように量から質へと変化しつつある。このような社会状況の中で河川は、自然を多く残した身近なイメージ・資源として注目されるようになってきた。全国各地で河川環境を整備する事例が増えて来ているのはこのありわれであろう。

しかし、河川環境に関する研究の歴史は浅く、河川環境整備の計画理論については、未だ確固たるものではないと考えられる。ここでは、既述の河川環境の整備に関する事例を分析することによって、河川環境整備計画を立案する際の基本的な考え方を整理し、報告する。

2. 基本的な3つの考え方

河川環境整備計画を立案する際の考え方をどのような地域を対象とするのかという観点より整理すると、以下の3つに大別できる。

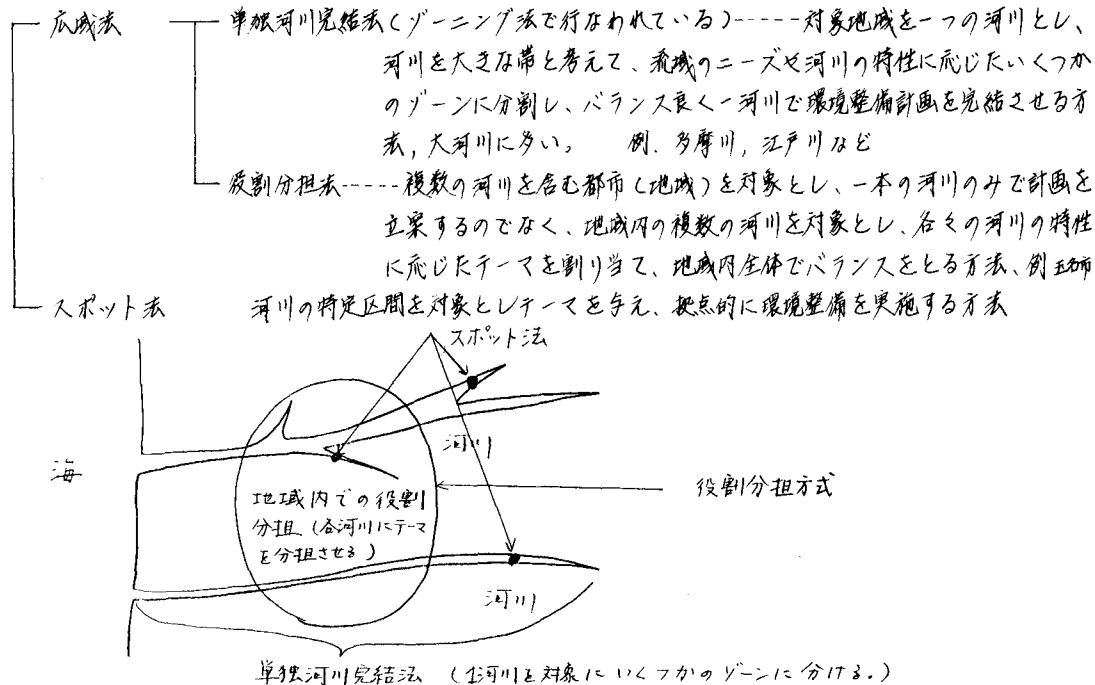


図-1 河川環境整備計画の3手法(概念図)

対象地域の考え方によって、以上3つの手法に分類したが、現実の計画では3つの手法に明確に分けられるわけではない。たとえば、スポット法として整備された計画でも、立案者の頭の中では単独河川完結法、役割分担法に基づき検討されていたものもあるだろう。また同様に、単独河川完結法といっても、無意識のうちに近隣の河川の整備との関連を計画されることもあるだろう。このことを十分考慮した上で以上3つの手法に整理した。

役割分担は、現在のところ筆者らの知るかぎりでは、玉名市の側面が大きくほとんど行なわれていないが、都市内の複数河川を対象とし、各河川の特徴に応じて役割を分担させる手案であり、都市を中心に河川環境を考
える場合には有効な考え方といえる。

点納的整備を行なうスポーツ系は、現在ひとつと多く行なわれている手法である。単独河川完結法、役割分担法などの広域的な整備手法にくらべるとスケールは小さいが、スポーツ系の集積が全国に河川環境を向上させようという気運を醸成しに作りあげてきていることは重要である。スポーツ系の積み重ねにより、少しずつ日本の河川環境は向上していると言ってよいだろう。

広域法の一つのゾーン・箇所スプロット法は、キャッチフレーズとなるようなテーマを定めて整備されることが多い。キャッチフレーズとなり得るようなテーマは、河川環境を整備する際の基本方針と考えることができる。これらのテーマは、実は河川の持つ親水機能の一部であり、それらの親水機能を発掘あるいは向上させることによって河川環境の整備が実施される。以下に現在までの事例にありわれたテーマのうち、河川の魅力をアピールする際に有効であると判断する7つのテーマをあげる。これら7つのテーマは互に重複する部分はあるが、現在行なわれている環境整備のテーマの考え方をおおむね網羅できると考えている。多くの河川環境整備の事例では、複数のテーマ（河川環境整備の基本方針）を組み合わせて実施している。

- 筆者らは、現地調査1)によって、河川の魅力として「川らしさ」が重要であるという結論を得ている。以上、7つのテーマは、それぞれ「川らしさ」の一部と考えることができるであろう。7つのテーマの上位概念として「川らしさ」があり、その一部の具体的表現として①から⑦に整理、分類できると考えている。現在行われているが、今後実施される可能性のあるテーマとして「川の音」「川の気候調整」などが考えられる。

ここでは、河川環境整備計画の立案手法について対象地域の設定という観点より、広域法(単独河川完結法、後割分担法)、スゴット法に整理した。またキャッチフレーズとなりうるようなテーマを7つあげ、その上位概念として「川レサ」が重要であることを示した。今後、「川レサ」について研究を続けていくつもりである。

2) 馬場・島谷：都市域に望まれる河川像に関する研究（その1） 工本研究所資料 2111号
3) 秋浦・島谷： " (その2) " 2223号
4) 秋浦・島谷・小栗、國府田、渡辺： " (その3) " 2224号